

## 太宰の生き方に触れて

弘前市立南中学校

齋藤 天菜

この夏、私は好きな文豪である太宰治の『人間失格』を選びました。太宰が大庭葉蔵の手記の形式で、どのように自己の生涯を綴つづっているのか興味をもって読み始めました。

物語の中で、特に印象に残り、深く考えさせられた場面があります。それは、

「咳き込んで口をハンカチで抑え込んでいたところに赤い靂あられが降せったみたいに血がついていた。けれど、その血は喉からではなく耳の下の小さいおできをいじってついた血でした。」

という場面です。ハンカチの血を使って起訴ができないようにしようとしたのではないかと私は思いました。また、利用できるものはすべて利用して嘘うそをつき通そうとする太宰の姿を見て、同じような状況下で太宰と同じような行動をとるのではないかと考えました。誰でもこの本能には逆らえないのですから。

もう一つは、

「そこで考え出したのは道化でした。それは、自分の、人間に対する最後の求愛でした。」

という場面です。理由は、自分を見失い、話すことさえ困難な状況で考え出した「道化」というものにおどろいたからです。私なら会話すら困難だったら、最初から話さずにいるでしょう。でも、太宰が導きだした答えは道化でした。どうしてそこまでして自分をとり繕おうとするのか理解が困難でした。ですが、太宰からみてみれば、自分の一番の生存ルートだったのかもしれませんが、でも、やはり、どうしてそこまでしているのかわかりません。

この小説を読む前は、太宰治の人生を綴っているだけなのに、なぜ題名が『人間失格』なのか疑問でした。でも、読み終わる頃には印象がガラッと変わりました。太宰は道化をしている時点で、人間失格している。女性と心中、自殺未遂をくり返している点からみても人間失格。また、単なる自分の人生だけでなく、相手の心情も、自分の心情のこまかい

部分まで綴られており、ざっくりとした感想を述べることは難しいと感じました。また、やはり太宰が他の人とは違うこともわかりました。太宰は、自分をあくまで他人事としてとらえているのです。文末表現が「だったらしい」などとなっており、他の人のことを語るような言いまわしが見られませんでした。太宰は本当に自分を見失い、道化をするしかないと思ひこんでいたのだと思います。だから、自分のことを他人事のように語るしかなかったのです。学校でも、家でも、ましてや友達にさえも道化として振る舞っていたのなら、そこまで突き通せるのがすごいと思いました。太宰治だからできたのです。

最後に、この小説と出会って学んだことは、自分のことは自分で主張すること、物事を深く考えすぎないことです。自分で主張することは誰だつて経験することです。太宰は自分で主張できなかつたから、最終的には道化という選択をすることになってしまいます。だから、自分の思ったこと

は主張することが大事だと思いました。でも、あまり思ったことをスバズバ言いきると、相手の癪しやくに障ることだつてあります。まずは自分の思いを大切に、少しずつでも主張していくことが大事だと思いました。また、物事を深く考えすぎないことは、今の私にすごく必要だと思っています。普段から深く考えすぎてしまうため、空回りすることが多くあります。深入りせず、少しだけ樂觀視していくのがいいと思います。太宰は物事を深く考えるくせがあつたと思います。だから、恐怖心におおわれ、自殺未遂をくり返していたのだと思います。太宰の姿から、物事を深く考えすぎず、あまりに樂觀視しすぎないことを学びました。太宰治は少しづつ、内側から壊れていっていたのでしょう。とするなら、人間も同じように内側から壊れていくのではないか、天才と狂人が紙一重と言われるのも、ここに理由があるのではないかと感じました。自分の価値観が、社会一般の価値観とはずれているという太宰の考え方に影響を受けました。